焼け野原になった市ヶ谷駅付近上空を飛ぶ B29
（毎日新聞社 / 時事通信フォト）

第1部

写真で見る戦争の記憶

私たちの日本は、どのようにして戦争へと歩みを進めてしまったのでしょうか。
第一次世界大戦後から第二次世界大戦の日本の主な動きを、写真で振り返ります。

戦争の道へ…

国際的な孤立から太平洋戦争へ

昭和6（1931）年に中国・奉天郊外の鉄道爆破事件を契機に始まった満州事変から戦火は中国全土に広がり、昭和12（1937）年の盧溝橋事件によって日中戦争が勃発しました。これにより日本は国際的に孤立をしはじめ、「ABCD（米・英・中・オランダ）包囲網」をはじめとした厳しい経済制裁を受けます。日本はその制裁解除に向けて交渉を重ねましたがいずれも決裂。陸軍を中心とした強硬論が台頭する中、昭和16（1941）年12月、日本はアメリカに宣戦布告をして太平洋戦争へと突入しました。

昭和17（1942）年1月～2月のラバウルの戦い、同年2月のシンガポール陥落など、当初は順調に戦果を上げるものの、同年6月ミッドウェー海戦での大敗を境に、形勢は逆転。昭和18（1943）年5月のアッツ島の戦いでの玉砕、昭和19（1944）年3月～7月インパール作戦の失敗、同年7月のサイパン島陥落など、拠点を次々と奪われていきました。

満州事変（昭和6年9月）
南満州鉄道の線路爆破を中国軍の仕業とする日本は、兵を進めて沿線都市を制圧。昭和7年3月に満州国を建国するに至った
（朝日新聞社 / 時事通信フォト）

満州皇帝溥儀が来日。昭和天皇自らが東京駅まで迎えに行った（昭和10年4月）
（昭和館提供）

盧溝橋事件（昭和12年7月）
北京郊外の盧溝橋付近で演習中の日本軍に対し、中国軍から射撃があったとされ、武力衝突に発展。日中戦争へと突入した
（毎日新聞社 / 時事通信フォト）

事変処理会議を行うために集まった、当時の首脳陣
（昭和館提供）

南京陥落（昭和12年12月）
日中戦争の中で、日本は中華民国の首都・南京を陥落させた。写真はその勝利を祝って皇居前広場に集まって万歳する5万人の女学生
（昭和館提供）

真珠湾攻撃（昭和 16 年 12 月）
ハワイの真珠湾に停泊する米太平洋艦隊に奇襲攻撃を仕掛けた。弾薬庫が爆発、炎上し傾く米太平洋艦隊戦艦アリゾナ
（Photoshot / 時事通信フォト）

戦勝に沸く日本

ラバウル攻略（昭和 17 年 1 月）
日本軍は豪州軍を破り、パプアニューギニアにあるニューブリテン島のラバウルを攻略。東南方面への攻撃の拠点とした
（朝日新聞社 / 時事通信フォト）

シンガポール陥落（昭和 17 年 2 月）
連合軍合同司令部の結節点であり、「難航不落の要塞」といわれたシンガポールを制圧。英国軍としては史上最大規模の将兵が降参した
（朝日新聞社 / 時事通信フォト）

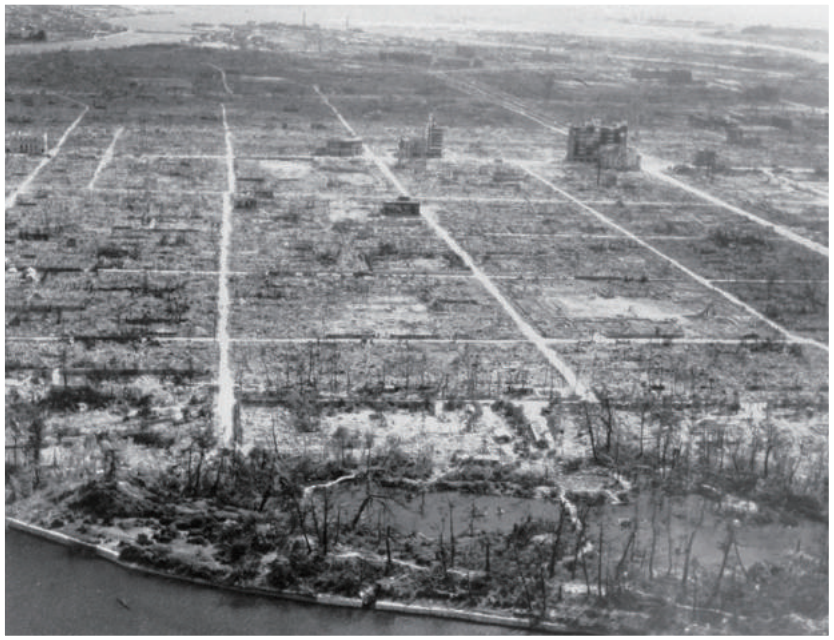
ミッドウェー海戦（昭和17年6月）
真珠湾攻撃で逃した米太平洋艦隊の撃滅を目指したが、逆に暗号を解読した米軍の奇襲攻撃を受け、主力空母4隻を失った
（毎日新聞社 / 時事通信フォト）

各地で相次ぐ敗北

サイパン島陥落（昭和19年6月～7月）
米軍が約6万人の体制でサイパン島に上陸。奪取後はB29の基地が整備され、日本空襲の拠点となった
（朝日新聞社 / 時事通信フォト）

硫黄島の戦い（昭和20年2月～3月）
本土への効果的な爆撃支援拠点を確保したい米軍との戦い。戦闘は1カ月以上続き、死者は日本軍が2万人以上、米軍も約7000人という激戦だった
（毎日新聞社 / 時事通信フォト）

レイテ沖海戦（昭和19年10月）
日本は主力艦隊を投入したが、圧倒的な航空戦力の違いにより敗北。日本の艦隊は壊滅状態となった。「神風特攻隊」はこのとき編成された
（朝日新聞社 / 時事通信フォト）



原爆投下（昭和 20 年 8 月）
人類史上初の核兵器が使用された。広島では約 14 万人、長崎では約 7 万人が犠牲となった。放射線によって戦後も長期にわたり人々を苦しめた
（朝日新聞社 / 時事通信フォト）

沖縄戦（昭和 20 年 3 月～ 6 月）
日本本土攻略のための航空基地・補給基地の確保を目指す、米軍を中心とした連合国軍との戦闘。日本側の死者 18 万人のうち半数以上が民間人であった
（昭和館提供）

泥沼化から終戦へ

玉音放送（昭和 20 年 8 月）
8 月 15 日正午、昭和天皇の声で太平洋戦争における日本の降伏が国民に伝えられた。放送後、皇居を訪れ土下座をする人も多かった
（昭和館提供）

ポツダム宣言（昭和 20 年 9 月）
9 月 2 日、東京湾内に停泊する米戦艦ミズーリの甲板で、重光葵外務大臣らが、宣言の条項の誠実な履行等を定めた降伏文書（休戦協定）に調印した
（昭和館提供）